

提出年月日：2021年11月11日（木）

大学コンソーシアム京都インターンシッププログラム

長期プロジェクトコース プロジェクト報告書

～働く×子育ての両立を大学生がイメージできる取り組みについて～

実習先：有限責任事業組合まちとごと総合研究所

実習生：飯田椋太、名越ほのか

1. はじめに

実習先の有限責任事業組合まちとしごと総合研究所は、下京・伏見・東山の市民活動センターを拠点に、地域の豊かな資源を活かしたまちづくりに取り組む企業である。今回は、SDGs をもとにしたダイバーシティズン・センターである下京いきいき市民活動センターと、コミュニティ・ラーニング・センターを目指す伏見いきいき市民活動センターが共同で行う、ローカル SDGs プログラムに参加し、実際に市民の公益活動の支援における過程を体験した。本報告では、まちとしごと総合研究所で行ったプロジェクトの活動記録とその成果を述べる。

2. 活動支援団体「オトナリラボ」

今回お力添えいただいたまちの事業者さんは、保育付きコワーキングスペースを運営するオトナリラボである。オトナリラボは、育児休業中のスタッフや待機児童のいるスタッフも自分のペースで働けるよう、会社の「子連れ勤務事業所」としてスタートし、子どもから大人まで気軽に立ち寄れる居場所づくりを目指している。

「子育て」と「働く」を考えるオトナリラボに、私たち学生ができることとして今回与えられた活動テーマは「働く×子育ての両立を、大学生が在学期間中にイメージできる取り組みを生み出すこと」である。テーマ、またオトナリラボの企業理念を踏まえ、「子育てと仕事の両立の現状を知り、団体様や地域の方と関わりながら課題を身近に考える」「情報発信など学生の強みを生かしながら活動する」という2つの活動目標を立てた。

はじめに、オトナリラボのことを知るために zoom で代表者である芳野様にヒアリングをしたり、性教育を考えるイベントに参加した。実際に現場を訪れることで、子育て家庭とのかかわり方やコワーキングスペースの雰囲気など、普段の活動の様子を肌で感じることができた。

3. 現状の把握

第一の活動として、子育てや両立にかんする社会課題を把握した。子育てにまつわる解決すべき課題はいくつもあるが、なかでも待機児童と性別役割分業が挙げられる。待機児童にかんしては、減少傾向ではあるが東京など都市部を中心に完全に解決しているわけではない。また、性別役割分業の考えが根付いていることにより、出産後に女性が退職するケースが多かったり、男性が育児休業を取得しにくい風潮環境であり、男性の取得率が低いという影響がみられる。このような課題により、親、特に母親は子供を預けて働くか、育児に専念するかで二極化していると言える。

他方で、大学生の多くは就活・進学に目が行き、育児や復職のイメージが弱いなど、両立について考える機会や時間が少ないことが推測される。実際に、周りの学生15名にヒアリングを行い、仕事と子育ての両立のイメージや現時点で考えているライフコースなどを聞いた。その結果、ほとんどの学生が、両立についてネガティブな印象を持っていたり、今まで考えたことがないということがわかった。

これらの現状を踏まえ、学生に両立をイメージしてもらうためには、「働く」と「子育て」のリアルな声を直接聞け、子育て家庭との気軽なやりとりができる場が適していると考えた。そこで、私たちは座談会イベントの提案を決めた。

4. 座談会に向けて

座談会実施に向けて、まずは両立への理解と自分の将来を考えていく必要性を感じた。そのため、夏季休業中に京都府が主催する「仕事と育児両立体験プログラム」長期プログラムへ参加した。このプログラムでは、両立している家庭にインタビューをしたり、課題に対する提案型のプレゼンを行った。お子さんとの交流や、保護者の方へのヒアリングを通して、両立をより自分ごととして考えるきっかけとなり、両立や自分のキャリアに向き合うことができた。さらに、飯田は、多くの人を巻き込むために「仕事と育児両立体験プログラム学生アンバサダー」としてプログラム終了後も活動を続けている。

並行して座談会に関する企画書(タイムテーブル等含む)や広報活動を実施した。企画書では企画の趣旨や内容だけでなく、参加者(大学生や子育て家庭の保護者様)にこの座談会を通じてどのような変容を及ぼすことができるかについても検討した。また広報活動では座談会の参加者募集のためのチラシや Google サイトを用いた本インターンシップ活動の HP 作成・更新を行った。しかし周知が予想よりも困難であったため、オトナリラボや下京・伏見いきいき市民活動センター、大学コンソーシアム京都インターンシップ事業推進室、京都文教大学、花園大学等の各 SNS やポータル配信を通じて多くの学生へ広報を実施した。結果として、学生事前座談会は定員 5 名に対し 5 名が参加、本座談会では定員 3 名に対し、3 名が参加した。

5. ホンネ座談会の実施

座談会では、「参加学生が将来のキャリア形成や仕事と育児の両立について関心を持ち、自分ごととして捉える」という目標を設定し、本座談会と学生事前座談会の二部構成で実施した。その理由は、参加学生に普段なかなか考える機会のない両立について、不安に思っていることや知りたいことを一度整理してもらうため、また、学生同士の親交を深めることで、良い雰囲気を作り、ご家庭との話し合いを活性化させるためである。また、両立に対する学生の印象や考えを事前に提示してから交流を行うことで、ご家庭の皆様がご経験を話しやすいという利点がある。以上三つの理由から、2 段階に分けた座談会イベントを実施した。

5.1 学生事前座談会

学生座談会では、「学生版モヤモヤ Map」から仕事と育児の両立の現状を知る」ということをテーマにして 9 月 25 日(土)オンラインで開催した。具体的には、本イベントのテーマと課題意識を共有を狙いとして仕事と育児の社会課題を紹介したのち、主に 2 つの取り組みを行った。1 つ目の取り組みが、学生版モヤモヤマップの作成である。不安要素を考え、それを可視化するために、オトナリラボが取り組まれているモヤモヤ Map を取り入れた。2 つ目が、仕事と育児版のクロスロードである。これは、状況や人物を仮定した設問に対して 2 択で答えてもらうワークである。普段から意識をすることが少ない学生に、少しでも両立を当事者目線で考えてもらうことを目的として取り入れた。

学生事前座談会では大きく 3 つの課題、改善点があった。1 つ目が当日の企画スケジュールが抽象的であったことだ。そのため、当時のタイムテーブルでは進捗が難しく、また臨機応変な対応ができなかった。この反省を踏まえ、本座談会では当日の細かい動きや役

割、準備物を書くなど、より具体的なタイムテーブルを用意することで、当日の動きがスムーズになるよう準備を行った。2 目がイベントのゴールが曖昧となっていたことである。参加学生にどのような状態で帰ってもらえれば満足のいく座談会と言えるのか、具体的な目標を設定していなかったため、イベントの趣旨が揺らいでしまった。3 目が運営に集中しすぎていたことである。運営者である私たち自身がイベントを楽しまなければ、現場の良い雰囲気を作れないし、参加学生への思い伝わらないということに気が付いたため、本座談会ではゆとりのある進行を心掛けた。

5.2 本座談会

学生座談会を踏まえ、10月9日（土）オトナラボと zoom のハイブリッドにて本座談会を開催した。本座談会では「子育て家庭との座談会(より幅広く、より自分ごとへ)」というテーマで、特に本座談会は実際の子育て家庭の保護者様4名にご参加いただき、これまでのご経験やターニングポイント、学生へのメッセージなどをお話しいただきながら学生のよりリアルなイメージへとつなげるねらいがある。具体的な企画内容は、はじめに学生座談会にて作成した「モヤモヤ Map」を「スッキリ Map」へと変えていく取り組み、2 目に普段大学生が交流することの少ない「子育て家庭からのご経験談・トークセッション」、最後に本イベントを踏まえて変化した点を挙げ、今後に活かせることを宣言する「大学生による両立未来宣言」を実施した。はじめの「モヤモヤ Map」から「スッキリ Map」への作成では2チームに分かれ、学生が抱えているモヤモヤやジレンマに対して保護者様が実際どのように対応、解決されてきたのかを付箋に記入し、可視化した。2 目の「子育て家庭からのご経験談・トークセッション」では特にご出産されてから現在に至るまでのモチベーションの増減や学生時代の感覚などをお話しいただき、キャリアの幅広さをイメージする企画とした。そして最後に座談会のまとめとして、参加学生（飯田、名越含む）より「大学生による両立未来宣言」を行った。これは本イベントに参加して変化した気持ちや意識を踏まえ、将来の両立のイメージ像やキャリア目標を語り、学生それぞれの変化や将来の方向性が表現された企画となった。イベント終了後、アンケートを記入いただき、振り返りを行ったところ、当初は学生への両立に対するイメージアップだけだと考えていたが、アンケートより参加した保護者様から、「自身の振り返り、客観視の場になった」、「学生のイメージがリアリティに感じた」というご感想をいただき、保護者様にも成果のある企画となった。

本座談会を終えて主に2つの課題が挙げられた。1 目は自由で活発な議論にするための進行力である。座談会では保護者様と参加学生が自由で活発な議論を目指していたが、参加学生の疑問や意見を話す機会が限られてしまい、議論を十分に深めることができなかった点は進行のファシリテート力が不足していたと言える。2 目は企画の進め方である。企画を進めるにあたり、事前の役割や進行の円滑さが重要となり、本座談会では具体的なタイムテーブルや役割を確認したが、臨機応変に対応することが難しく、最終的に本座談会終了が数分延びた。以上の課題より企画のテーマ設定をより一層明確化し、十分な議論ができるタイムスケジュールの設定、議論が延びた際のリスケジュールが今後は求められる。

6. より多くの学生へイメージする機会を作るために

「ホッネ座談会」を踏まえ、私たちはより多くの学生に両立に対するイメージする取り組みを波及していきたいと考えた。そこで企画したのが、防災ゲーム「クロスロードゲーム」を参考とした「シゴイクカードゲーム」である。シゴイクカードゲームでは仕事と育児において発生するであろうジレンマを設問とし、二通りの解決策をカード化し、当事者意識を持ってどちらか一方の解決策を判断するというゲームである。これにより多くの学生がリアルにイメージできる点や子育て家庭側も現実として起こっている問題をカード化することで本音の悩みやモヤモヤを共有できる点もメリットとして挙げられる。しかし作成には多数の課題がある。すでに述べたように「シゴイクカードゲーム」は防災ゲーム「クロスロードゲーム」を参考としており、商標権は同一の商標や商品等だけでなく、類似する範囲にも及ぶため、商標権に関する課題がある。また本ゲームにおいて仕事と育児の両立ができる、また魅力と捉えることが目的であるが、両立を知るだけでは両立の難しさやゲームを通じて現実的な問題を知った時、自分には荷が重いと感じる学生も出かねない。加えて、ルールや設問に曖昧さがあり、大学生をはじめとする子育て家庭ではない非当事者がゲームとして使用した際、解釈に違いも発生する恐れがある。このような課題より、本インターンシップ期間中の試作版作成は困難であるという結論となった。一方で今回の課題は実習先のオトナリラボとヒアリングを重ね、課題の把握や方向性を導くことができたため、視野を広げて物事を見極める考察力が重要であると認識できた。

7. まとめ

以上が本インターンシッププログラムでの活動である。これらを踏まえて、1, 妥当性、2, 有効性、3, 効率、4, インパクトの観点より検証・評価する。1, 妥当性の観点では妥当であると評価できる。一方で、本イベントが1度や2度の開催、参加では明確なイメージを獲得するのは難しいため、継続的な実施、あるいはイベント内で参加者に何を得てもらうかを明確にすることがより求められると考える。2, 有効性ではまず課題を身近に考えるという目標を設定していたが、オトナリラボのイベント、両立体験プログラムを通じて多くの人と一緒に考えられ、これらのインプットを基に企画を実現できたため、達成したと言える。また同世代と共に仕事と育児の両立について考えを共有し、自身の将来を見据えるという目標についても、学生事前座談会の「モヤモヤ Map」作成や本座談会でのグループワークを通じて、両立について知り、今後のキャリア選択に活かせると考えている。しかしイベント参加後の仕事と育児の両立に対する意識調査は未実施なため、一部未達成である。3, 効率では当初考えていた成果（イベント企画）は達成できた。また成果を生み出したことにより、新たな成果物（シゴイクカードゲーム）を企画できた。しかし試作版を作成することに固執し、企画が不十分な状態で進めていたため、再度企画の練り直しが必要となった。この点より、先に企画の部分の固める必要があり、無理に企画を進めた点は反省点である。最後の4, インパクトではプロジェクトとして一定の目標を達成でき、社会的なインパクトも及ぼすことができたと考える。特に新型コロナウイルス感染症の影響により、状況が刻一刻と変化しながらも大きな滞りなく進められたのはオンラインの活用やイベントの柔軟性を持たせたことが要因として挙げられる。一方で仕事と育児の両立をイメージするというテーマにおいて両立を目指さない学生にとっては、イベントの趣旨とは異なる

ため、誰もが参加し、成果を得られるイベントにできなかった点は今後の課題となった。

8. 謝辞

今回の大学コンソーシアム京都インターンシッププログラムにおいて、数多くの方々にご協力・ご尽力いただきましたこと、御礼申し上げます。特に実習先のオトナリラボ代表 芳野様、下京いきいき市民活動センター 吉田様、伏見いきいき市民活動センター 藤本様、コーディネータの花園大学 深川先生、大学コンソーシアム京都インターンシップ事業推進室の皆様には随所で大変お世話になり、心より御礼申し上げます。

本インターンシップでの経験を糧に、今後の学生生活や勉学により一層励んでいきたいと思えます。